

楊萬里の「喜雨」詩について

坂井多穂子

南宋の楊萬里（字は誠齋）が膨大な数の雨の詩を制作したことは知られているが、恵みの雨を「禱^{いの}」り、降雨を「喜ぶ詩を多作していたことについては指摘されていない。「喜雨」詩といえば、盛唐の杜甫の「春夜喜雨」詩が有名であるが、その杜甫の「喜雨」詩は計五首である。² 矢嶋美都子氏がいうように、「喜雨」詩は、魏の曹植以来、盛唐までは、「宮廷詩人的立場の詩人によって詩題とその詠じる内容を變えずに詠い繼がれてきた一首の特殊な雨の詩群」であった。矢嶋氏はさらにそれらの詩の内容は、「天（天子）の徳を稱える表現、雨が降る豫兆、雨が降っている様子、秋には良い穀物が収穫されるだろうという五穀豊穰を言祝ぐ表現」の四項目に分類することができ、盛唐以降は「多様化」をみせると指摘する。

本論考では、「喜雨」の詩のみならず「禱雨」の詩⁴など雨を待ち望む詩群にも視野を広げて、楊萬里がそれらの作品においていかに恵みの雨を乞い、喜んだのか、時期（年齢）によるその特徴の変遷をみてゆきたい。

楊萬里集は「一官一集」、すなわちひとつの官職の在任期間の作品がひとつの集にまとめられ、全部で九集存在する。本論で取りあげる「禱雨」の詩と「喜雨」の詩は、楊萬里の第一集『江湖集』に九首、第二集『荊溪集』に四首、第五集『朝天集』に一首、第八集『江東集』に二首、第九集『退休集』に六首、計二十二首みえる。楊萬里が生涯にわたってつねに恵みの雨の多寡を気にかけていたことを示している。

それ以外の時期の集に用例が見られないのは、たまたまその時期に早魃がなかった可能性もなくはないが、それ以外の理由も考えられる。たとえば孝宗が早魃に対する意見を求めたのに応えて楊萬里が「早嘆應詔上疏」を上奏した淳熙十四（一一八七）年、彼はほかに「聖上閔雨、遍禱未應、下詔避殿減膳、感歎賦之」詩一首（卷二十三『朝天集』）を作っている。天子が憂え、臣下も天子に上奏するほどのひどい早魃であったのに、それを詠った詩は一首のみというのは、いささか少ない⁷。その詩は、雨乞いも効果むなしいことを憂えた「聖上」(孝宗)の「避殿減膳」して楽しみを排除する姿勢に、楊萬里が「感歎」して「賦」したものである。早魃は天子の施政に対する「天意」とみなされていた。詩の内容は天子の徳ある行いをたたえるなど、矢嶋氏のいう四項目に属する内容を詠いあげ、伝統的な手法に沿った作詩といえよう。ここには楊萬里自身の「閔雨」(雨不足を憂える)の感情はほとんどみられない。この時期、楊萬里は都臨安にて尚書省右司左司郎中、東宮侍讀官を兼任し、政府の中樞にあった。『朝天集』にはほかに雨を待ち望む詩がみられないのは、楊萬里が「宮廷詩人的立場」で形式重視の作品を多作することにあまり積極的でなかったことを示している。

生涯を通じて「禱雨」の詩と「喜雨」の詩を制作しているが、なかでも次に挙げる時期に比較的多くみられる。

(一) 零陵 三十六〜三十七歳 (二首)

(二) 故郷 三十九〜四十歳 (七首)

(三) 毘陵、常州 五十一〜五十二歳 (四首)

(四) 故郷 六十六〜八十歳 (六首)

(一)と(三)は地方官在任時、(二)と(四)は故郷吉州での作で、故郷での作が多い。また、(四)は退居後であることから、「宮廷詩人的立場」(矢嶋氏)でなくなつてからも、「禱雨」「喜雨」の詩を作り続けていることが分かる。次章以下、四つの時期における「禱雨」「喜雨」の詩の特徴と変化をみてゆきたい。

一 零陵にて

楊萬里がはじめて「早」を主題にしたのは、管見では「視早憩鏡田店」詩(卷一『江湖集』所収)である。「鏡田店」は薛瑞生⁸によれば、「永州之村鎮名、具體所在未詳」であるから、永州零陵縣丞の在任中に、所轄の早魁の状況を視察した時のことを詠う。この詩は楊萬里三十六歳の紹興三十二年(一一六二)年七月に、江西詩派と決別すべく、それ以前の作品千首餘を焚き棄てた直後の作である。詩の冒頭で、

走檄堪頻捧、 檄を走らせ 頻りに捧ぐに堪う

嚴程敢少徐。 嚴程 敢えて少しくも徐ろにせんや

と、早魃を戦にたとえ、「檄」文（緊急文書）を「走」らせて、過密日程を急ぎこなさんとする。零陵縣丞として早魃をはやく終わらせたいたとの楊萬里の使命感と焦りがうかがえる。

この直後の作である「視早遇雨」詩は、早魃の視察の最中に雨に遭ったことを詠う。詩全体を挙げると、

已早何秋雨、 已にして早何ぞ秋に雨ふる

無禾始水聲。 禾無く始めて水聲。

病民豈天意、 民を病ましむるは豈に天意ならん、

致此定誰生。 此を致すは定めて誰か生ずる。

湯爪寧須剪、 湯爪寧ろ須らく剪るべし、

桑羊可緩烹。 桑羊烹を緩むべし。

小儒空自歎、 小儒空むなしく歎き、

得到鳳凰城。 鳳凰城に到るを得。

「早魃になつて久しいのになぜ秋に雨が降るのか。稲も無くなつてからようやく雨音がするとは遅すぎる。人民を苦しめるのは天の意であるはずがない。こんなことをするのは誰のしわざか。張湯の爪は切るべきだし、桑弘羊は酷刑を緩めるべきだ。私はそう嘆きながら永州の街に到着した」と詠う。「湯爪」は『史記』「酷吏列傳」にみえる酷吏の張湯の爪のことで、「桑羊」は『漢書』「霍光傳」にみえる酷吏の桑弘羊を指す。二人の酷吏はここでは民衆を苦しめる早魃をたとえたものである。杜甫が「好雨時節を知る、春に當たりて乃ち發生す」（「春夜喜雨」詩）と詠ったように、

万物の「發生」を助ける「時節」を外さずに降るのが「好雨」である。本詩のように時期を得ずに降る雨は、「喜ばしいものではない。」「湯爪」「桑羊」に対してなすすべもない「小儒」（楊萬里）は、無力感におそわれて「空自しく」「歎」いて永州に到着した。¹⁰この詩にみる第一期の楊萬里は「禱雨」（雨乞い）しつつも、降った雨を「喜ぶ」こともなかった。早魃と時期外れの雨を「視」るだけの受け身で無力なおのれをただ「歎」いている。

二 故郷にて

零陵縣丞の任期が満ちて隆興元（一一一六三）年春に楊萬里は帰郷した。亡父楊芾の服喪中の乾道元（一一一六五）年三十九歳の時、厳しい「旱」が一带を襲い、楊萬里は「禱雨」の詩と「喜雨」の詩を立て続けに制作する。「憫旱」、「和蕭伯振禱雨」、「早後郴寇又作」、「早後喜雨四首」、「和昌英叔夏至喜雨」、「還家秋夕飲中喜雨」、「晚登清心閣望雨」の七作品である（いずれも卷三『江湖集』所収）。そのうち、早魃を憂える「憫旱」詩は、全十七句で四度換韻する。冒頭に、雨を呼ぶといわれる「鳴鳩」や「阿香」などの伝説上の動物や人物をとりあげて、かれらの働きが足りないことを嘆いたあと、次のように詠う。

下田半濕高全坼、 下田半ば濕るも高きは全く坼け

幼秧欲焦老差碧。 幼秧焦げんと欲し老いたるは差碧なり

書生所向便四壁、 書生 向かう所は便ち四壁

賣漿逢寒步逢棘。 漿を賣り寒に逢い歩棘に逢うがごとし

早魃が田に与えた影響と田の持ち主の窮状について詠う。「下の田は半分ほど湿っているが高いところの田は地割れをおこしている。幼い苗は焦げ付きそう、成長した苗はやや緑色を保っている。私の向かうのは四方に壁があるだけの粗末なあばら屋で、飲み物を売り歩き、寒波のなか、棘を踏んでいるかのようにそろそろ歩く」。この詩の「書生」は当時、故郷にて無官の日々を送っていた楊萬里自身。口に糊するために飲み物を売り歩いていたのか。

還家浪作飽飯謀、 家に還り浪りに作す飽飯の謀

買田三歳兩無秋、 田を買いて三歳兩に秋無し

一門手指百二十、 一門手指百二十

萬斛量不盡窮愁、 萬斛量るも窮愁盡きず

「故郷に帰って来たときは、これで腹一杯食べられるともくろんでいたが、田んぼを買って三年、そのうち二年は秋の収穫がなかった。わが家族は百二十本の指、十二人。悩み苦しみは一万斛でも量りつくせない」。零陵の任が満ちて帰郷してから三年が経った。大家族を抱え、帰郷当初の「飽飯謀」の当てが外れて生活苦にあえいでいる。ここに描かれている彼自身は、零陵時代の「早」を「視」察する官吏ではなく、「早」の影響を直接受けるひとりの農夫である。この詩は局外者の「歎」ではなく、当事者の「窮愁」を詠う。

小兒察我慘不樂、 小兒我の慘み樂しまざるを察し

旋沽村酒聊相酌、 旋りて村酒を沽い聊か相い酌す

更哦子美醉時歌、 更に哦う子美醉時の歌

焉知餓死填溝壑。 焉くんぞ知らん餓死して溝壑を填むるをと

水車啞啞止復作。 水車啞啞止まり復た作す

わが子は私が惨めたらしく楽しくない気持ちでいるのを察知し、村の酒を買ってきて酌をしてくれる。酔った私はさらに杜子美の「酔時歌」を口ずさむ。「焉くんぞ知らん餓死して溝壑を填むるを」と。水車はぎしぎしと止まってはまた動き出す。

この段のみ奇数句からなる。「酔時歌」は杜甫が四十三歳、鬱々と過ごしていた無官の時に、同じく不遇の友、「虞文館鄭虔」に贈ったもので、「錢を得て即ち相い覚め、酒を沽い復た疑わず」¹¹、錢を手に入れると迷うことなく酒を買い、「但だ覺ゆ高歌鬼神有るを、焉くんぞ知らん餓死して溝壑を填むるを」¹²、高らかに歌えば鬼神の手助けがあるかのように感じられ、餓死して溝や溪に骨を埋めようと気にならない、と酒の力で不遇を忘れようとした。楊萬里は「慘不樂」なる気持ち、杜甫にならって酔って紛らわそうとする。ただ、「水車」は相変わらず水不足で止まったり動いたりを繰り返し、鬼神の手助けは得られない。「啞啞」と鳴く「水車」の音をききながら、「餓死」が近づいていることを楊萬里は「酔」いながらも感じている。

楊萬里は「禱雨」の詩や「喜雨」の詩において、しばしば杜甫をふまえている。「憫雨」詩と同時期の「和蕭伯振禱雨」詩の尾聯に、

未辭托命長鑱柄、 未だ命を長鑱柄に托するを辭さず

黄獨那能支一年。 黄獨那ぞ能く一年を支えんや。

「長鏡柄に命を託すのは辞さないが、土いもだけで一年を過ごせるわけがない」というのは、杜甫の「乾元中寓居同谷縣作歌七首其二」の、

長鏡長鏡白木柄、 長鏡長鏡白木柄

我生託子以爲命。 我が生子に託して以て命と爲す

黄獨無苗山雪盛、 黄獨苗無く山雪盛んなり

短衣數挽不掩脛。 短衣數しば挽くも脛を掩わず

「長鏡柄（長い柄のついたすき）よ、きみに我が命を託そう、土いもは山に雪が盛んに積もって見つからないし、私はその雪のなか、裾の短い衣を何度引つ張つても脛を隠せない」をふまえ、我が身の窮状と心境を杜甫のそれに重ねている。

「早後郴寇又作」に触れておきたい。「郴寇」とは、「憫旱」詩と同じ乾道元（一一六五）年の五月、郴州（今の湖南省郴県）の民、李金が起こした乱を指す。¹³「早」の「後」というが、「好雨」の喜びは描かれていない。冒頭に、

自憐秋蝶生不早、 自ら憐れむ秋蝶生まること早からざるを、

只與夜蛩聲共悲。 只夜蛩と聲共に悲し。

「蝶は本来生まれるべき春ではなく秋に生まれ、夜に蟋蟀と共に鳴くしかない」と、太平の時代に生まれ得なかつた不遇を「秋蝶」になぞらえて嘆く。そして、詩の後半には、視線を我が身の不遇から「郴寇」に転じ、次のように詠う。

去秋今夏早相繼、
去秋今夏早相繼ぎ、

淮江未靖郴江沸。
淮江未だ靖からざるも 郴江沸く。

餓夫相語死不愁、
餓夫相い語るに 死も愁えず

今年官免和糴不。
今年 官 和糴を免ずるや不やと。

昨秋からの相繼ぐ早魃に追いつめられた「寇」（賊）の「餓夫」は口々に、「餓死することは怖くないが、今年、お上は穀物の買い上げ（「和糴」）を免除してくださいさるだろうか」という。「寇」と呼びながらも、彼らに対する楊萬里のまなざしは同情的である。「餓夫」の「愁」えているのは「餓死」ではなく、「和糴」である。すなわち、李金の乱の原因は「旱」ではなく苛政にあると楊萬里は「餓夫」の台詞の形をとって言う。類似の句は、さきほどの「和蕭伯振禱雨」詩にもみえる。

餓死何愁更平糴、
餓死 何ぞ愁えん 更に平糴あるを、

野夫半去只荒田。
野夫半ばは去り 只 荒田あるのみ。

「餓死せんとする時に平糶（穀物の買い上げ）のことまで心配していられるものか。農民は半分が土地を捨て去り、あとには荒れ田のみが残っている」。この後は「未辭托命長鑿柄、黃獨那能支一年」（前出）で結ばれ、全詩を通して、「死」の恐怖が描かれていた。それに対して、この「早後榔寇又作」の「寇」が「愁」えるのは「和糶」であり、苛政である。第一期の「視早遇雨」詩では、「民」を「病」ましむ「早」を、張湯・桑弘羊の酷吏にたとえ、「早」の無慈悲を訴えたが、本詩の「民」は「早」のみならず苛政にも「病」ましめられている。「餓夫」の叫びは、早魃の「相」い「繼」ぐ現状がこの苛政によつてもたらされたこと、すなわち早魃は苛政に対する「天意」であることを匂わせている。

「喜雨」の詩群をみてみよう。

第二期には、「早後喜雨四首」、「和昌英叔夏至喜雨」、「還家秋夕飲中喜雨」、「晚登清心閣望雨」がある。「喜雨」の詩との相違点はもちろん、降雨の描写の有無にある。雨の情景を描く句を以下にならべる。

平生愁聽芭蕉雨、 平生芭蕉雨を聽くを愁う

何事今來聽不愁。 何事ぞ今來聽くも愁えざる。

〔早後喜雨四首 其四〕

花外綠畦深沒鶴、 花外綠畦深く鶴没す

來看莫惜下邳侯。 來たりて看よ下邳侯を惜しむ莫かれ

〔和昌英叔夏至喜雨〕

秋雨亦嫌秋熱在、 秋雨亦秋熱在るを嫌い

打荷飄竹爲人來、 荷を打ち竹を飄し人の爲に來たる。

〔還家秋夕飲中喜雨〕

喜雨不但人、 雨を喜ぶは但だ人のみにあらず

松竹亦鼓舞。 松竹も亦鼓舞す。

〔晚登清心閣望雨〕

これらの用例には、雨を喜ぶ自然物、すなわち、雨音をたてる「芭蕉」の葉や、湿気を含む風景にうもれた「鶴」、雨風に揺れる「荷」「竹」「松竹」といった観賞用の風雅な動植物が詠み込まれている。さきに見た「禱雨」の詩では、稲や「黄獨」（土いも）など、生活と密接な農作物が取り上げられ、稲が枯死せんとする危機と「餓死」の危機に瀕する農夫が描かれていた。生活臭にあふれていた。だが、恵みの雨が降ったとたん、農村に居りながら、「雨」を「喜ぶ稲を描かない。その雨を「喜ぶのは枯死の危機を脱した稲ではなく、「禱雨」の詩には全く描かれていなかった風雅な動植物である。

風雅な動植物が雨を「喜ぶ」情景は、餓死の危機を脱した詩人の安堵感を表していよう。杜甫を例に挙げれば、その「喜雨」詩に、

巢燕高飛盡、巢燕高飛し盡くし、

林花潤色分。林花潤色分かる。

「巢にいた燕はみな高く飛んでゆき、林の花は潤いを帯びて色の濃淡がはつきり分かれた」と、「雨」を「喜」ぶ「燕」と「花」が描かれている。この詩は杜甫が成都滞在時、すなわち杜甫の後半生におけるもつとも平穏な時期の作である。いっぽう、杜甫の別の「喜雨」詩には、

穀根小蘇息、穀根小しく蘇息し、

沴氣終不滅。沴氣終に滅せず。

と、雨で穀物の根が少し息を吹き返したが、「沴氣」(悪気)がまだ殲滅されていないことを愁えている。杜甫の自注に「時浙右多盜賊」というように、不穏な世情に対する不安がその根底にある。不安要素が消えて安堵して初めて、風雅な花鳥に目を向ける余裕が生じる。楊萬里も同じ心境であろう。

三 常州にて

楊萬里は、淳熙四(一一七七)年春、五十一歳の時に常州の知州に任ぜられた。常州在任時期は、彼の文学活動において大きな転機となった時期である。翌淳熙五(一一七八)年五十二歳の元旦の朝、「忽若有寤」、突如、詩作に悟り、

「於是辭謝唐人、及王・陳・江西諸君子皆不敢學、而後欣如也」、それまで詩作の手本にしてきた晩唐の詩人や王安石、陳師道、江西詩派の作品に別れを告げ、まるで、「萬象畢來、獻予詩材」、目に映る全てのものが自分に詩の材料を提供してくれるかのように詩作が容易になったという。¹⁵ この転機は、「禱雨」「喜雨」の詩の制作においても、何らかの変化をもたらしているだろうか。

この年、常州に旱魃が発生し、楊萬里は「常州禱雨疏」「又常州禱雨疏」という「禱雨」についての文書を上奏し、さらに「禱雨報恩、因到翟園」、「六月喜雨」、「和李子壽通判、曾慶祖判院投贈喜雨口號」、「望雨」の四詩において降雨の喜びを詠っている（常州時期には「禱雨」の詩はない）。

「常州禱雨疏」には、「吏之多罪、積繆政以傷和」と、「吏」の立場から旱魃の原因はおのれの「繆政」（誤った政治）にあるとして、おのれの「多罪」を認めている。「又常州禱雨疏」によれば、「仲夏」（五月）に「藝其苗」（其の苗を藝え）たものの「無寸之水」（一寸も水がない）というありさま。しかし、

守臣兩月禱山川、守臣兩月山川に禱り、

詔旨纔頒便沛然。詔旨纔かに頒たまわるや使ち沛然たり

（六月喜雨三首其一）

二ヶ月間、「守臣」（楊萬里）の雨乞いの効果はなかったが、六月に「詔旨」を賜ったとたんに土砂降りになった。「好雨」（杜甫・前出）は古来、まつりごとがよく行われていることの証であり、旱魃は悪政に対する天からの罰とみなされていたため、楊萬里は五月以来の旱魃をおのれに対する天からの叱責とし、六月の降雨を天子に対する天からの

ことほぎとみなし、天子のために「喜」んだ。この時期の楊萬里は、為政者の一人であるみずからに早魃の原因があると認識して「旱」を憂い、「民」のために雨を乞い豊穰の秋の到来を願っている。

雨の描写については、たとえば、

夢中檐溜作灘聲、 夢中檐溜りて灘聲を作し、

幼竹新荷總解鳴。 幼竹新荷總て解く鳴く。

曉色滿城渾是喜、 曉色滿城渾て是れ喜なり、

更無一寸早時情。 更に一寸の早時の情無し。

(「和李子壽通判、曾慶祖判院投贈喜雨口號」其四)

のように、楊萬里は屋内にいて、軒を滝のように滴り落ちる雨音や、風雨に打たれた「幼竹」「新荷」の「鳴」く音に耳をすませている。ここでも雨を喜ぶ風雅な植物を描いているが、第二期との違いは、楊萬里が農村にいないことである。常州の城内に住む楊萬里の目に映るのは「滿城」(常州の城内)の情景であつて、農村の田畑ではない。「雨」を「喜」ぶ農作物を描かないのは、それが目に触れる距離にないからである。農村の描写が全くないわけではないものの、

雨早些時打麥殘、 雨些時も早ければ麥の殘れるを打たん、

雨遲許日即秋乾。 雨許日より遅ければ即ち秋乾かん。

雨の降るタイミングが少しでもずれれば、刈り取って干している麦を濡らしたり、稲の苗を枯らすことになったであろう、と詠う。「麥」や「秧」は、このたびの雨が「時節」を「知る」「好雨」であることを述べるために引き合いに出されたにすぎず、農村の実景の描写ではなからう。第三期の楊萬里は、常州城内に住む「吏」として「雨」を「喜」んだ。

また、この「喜」びの表出も単純ではない。同じ年の作「望雨」の一部を次に挙げる。

山川已遍走、山川已に遍く走り、

雲物竟索寞。雲物 竟に索寞たり。

雙鬢愁得白、雙鬢 愁いて白きを得、

兩膝拜將剥。兩膝 拜して將に剥がれんとす。

早知今有雨、早に今雨有るを知らば、

老懷枉作惡。老懷 枉げて惡を作さんや。

「雨乞いのために私は山川をくまなく走り回り、そこで見た景色はがっかりさせるのであった。早魃を愁うあまりに両側の鬢の毛は白くなり、雨を求めて跪いたために両膝は擦り剥けて剥がれ落ちそうだ。今雨が降るともつと早くに分かっていたら、無理をして心を傷めたりはしなかったのに」。詩題が「喜雨」ではなく「望雨」（雨を眺める）であることが暗に物語っているのだが、ここでの楊萬里は雨を降ったことを手放して喜んでいるようではない。五十二歳の老体に鞭打って懸命に雨乞いをしたことをむしろ悔いている。

なお、「望雨」という題の作品は第二期にも制作しているが、そこでは冒頭に「雨を憫え雲を見るを喜び、雲を喜び雨ふらざるを愁う」¹⁶（「晚登清心閣望雨」詩。四十四歳、故郷吉州）と早魃の不安と降雨への期待を詠い、つづいて「雨を喜ぶは但だ人のみにあらず、松竹も亦鼓舞す」¹⁷と率直に雨を喜ぶものだった¹⁸。それに対して、この第三期の「望雨」詩の末句は、雨が降ると分かっていたなら雨乞いで無理をしなかったのに、と一見、為政にかかわる者らしからぬ不真面目な物言いである。自分が身をすり減らさなくとも、降る時には降る、とまるで雨乞いなど効果がないと言わんばかりだが、これは降雨の喜びを逆説的に語るもの、周汝昌の言を借りれば、「喜極之語」¹⁹、喜びが極まり度を失ったのである。

四 故郷に退居して

江東転運副使として建康にいた紹熙三（一一九二）年、六十六歳の楊萬里は、江南諸郡に鉄銭会子の使用を命ずる朝廷に上訴するも容れられずに離職し、秋に帰郷した。このあと、八十歳で死ぬまでの第四期の十五年間を故郷吉州に退居して、第二期と同様、稲を作って過ごした。この時期の作品には、「喜雨」、「六月初四日往雲際院、田間雨足、喜而賦之」、「久旱禱雨不應、晴天忽落數點」、「夏夜喜雨」、「九月三日喜雨、蓋不雨四十日矣」、「病中喜雨、呈李吉州」があり、うち四首が雨を喜ぶ作品である。

第四期における「禱雨」の詩は、「久旱禱雨不應、晴天忽落數點」の七絶一首のみ。次にその全体を挙げる。

烈日秋來曬殺人、 烈日秋來人を曬殺し、

青天半點更無雲。 青天半點更に雲無し。

忽傳天上真珠落、 忽ち天上より傳わりて 真珠落ち、
未到半空成水銀。 未だ半空に到らずして 水銀と成る。

雨乞いの甲斐なく続く早魃の日々のなかで、突然、「晴天」から落ちてきた「數點」（数滴の水）を詠った詩である。照りつける（曬殺）ような烈しい日差し（烈日）の続く「秋」に、豊かな実りは期待できぬだろうが、それには触れず、「忽傳天上真珠落、未到半空成水銀」、舞い落ちる数片の雪が、空中で解けて雨となったのを「真珠」や「水銀」に喩える。さきに見た「禱雨」の詩群に描かれてきたのは枯死せんとする農作物や困窮する農夫であったが、この詩はそういった生活臭や焦燥感とは無縁である。楊萬里は雨を求めて頭上を見上げた時、「青天」（碧空）から落ちて来る数滴の雫の輝きに眼を奪われた。寶石のように美しい、と感じたままに描いたのがこの作品である。「早」続きの乾いた地で期待されるのは「霖」（三日以上続く長雨）であつて、わずかに数滴のしずくではない。晴れ渡った空に「雲」はなく、「霖」の兆しは見出せないが、数滴しか降らなかつたことへの無念は描かれない。「憫雨喜見雲、喜雲愁不雨」（晩登清心閣望雨）詩、前出）のような、雨の兆しを発見してからぬか喜びに終わる（または雨が降つて喜ぶ）までの経過と心の動きもない。兆しを見つけた瞬間の情景のみを切り取つた。生活や社会のことはしばし忘れ、目に留まつたものの美しさに心奪われる詩人楊萬里。齡七十五を越えていながら、まるで子供のような感性をみせている。「萬象畢來、獻予詩材」（前出）。数滴の雨が瞬時にして、「詩材」として「獻」ぜられたのである。「喜雨」の詩群にも、これ以前にはみられなかつた内容が描かれている。つぎに該当部分のみを挙げる。

歳歳只愁炊與釀、 歳歳只えに愁う炊と釀とを、
今愁無甑更無餅。 今愁う甑無く更に餅無きを。

〔喜雨〕

今歳應須熟、 今歳應須まさに熟すべし、
餘生有底愁。 餘生底なんの愁有らん。
無人知喜事、 人の喜事を知る無し、
課僕織新篋。 僕に課して新篋を織らしむ。

〔夏夜喜雨〕

稻裏雲初活、 稻裏雲初めて活き、
蓄梢雪再鋪。 蓄梢雪再び鋪く。
老農啼又笑、 老農啼き又笑う、
欲去且安居。 去かんと欲するも且く安居す。

〔九月三日喜雨、蓋不雨四十日矣〕

これらの三詩には、「老農」(楊萬里)の生活が描かれている。例年は飯と酒の心配をしていたが、今年はそれらを容れる器がないのが悩みだ、と食料不足が解消されて物不足を詠う「喜雨」詩。今年の収穫は期待できるし、余生はも

う心配ないから下僕に酒を濾す道具を作らせよう、とやはり生活用品の不足を詠う「夏夜喜雨」詩。水を得て元氣を取り戻した農作物に安堵して「啼」き「笑」いながらその場に佇む「九月三日喜雨、蓋不雨四十日矣」詩。これらの作品では、お上の存在が意識されることはなく、暮らしの安定を「喜」ぶ農夫が描かれる。とくに第一首の「喜雨」詩の、あえて「喜」ばず「憫」え続ける姿には諧謔味が感じられる。「雨」を「喜」ぶ農夫はこれ以前の「喜雨」の詩群にはほとんどみられない。²¹

楊萬里の「喜雨」「禱雨」の詩は、立場の変化（自らが農夫であるか否か）に伴って、その内容も変化する。零陵知縣の第一期は、早魃を「視」るだけの、無力な局外者であった。故郷に暮らした第二期では、早魃に困窮する農夫のみが描かれ、雨を得た農夫の喜びは描かれなかった。詩的悟りを得た常州知州の第三期では、楊萬里は為政にかかわる者として「天子」のために雨を喜んだ。退居後の第四期には、「禱雨」よりも「喜雨」を重点的に描き、雨を喜ぶ農夫を美感をこめて描くようになった。楊萬里の多様性と変化は、「喜雨」詩というもとは限られた内容を詠った詩群においても発揮されている。折々の雨の喜びを「正心誠意」に写し出した結果である。

- 1 錢鍾書「談藝錄」（中華書局一九八四年）、陳平「楊萬里の自然描写——『雨』を中心に——」（『京都産業大学論集』人文科学系列第二十九号平成十四年三月）などにみえる。
- 2 うち一首の「喜雨」詩については、「喜晴」に作るテキストもある。
- 3 矢嶋美都子「豊作を言祝ぐ詩——『喜雨』詩から『喜雪』詩へ——」（『日本中國學會報』第四十九集一九九七年十月）
- 4 本論文では、雨を待ち望む詩という意で、「憫雨」詩も「禱雨」の詩に入れた。また、「旱」を詩題に掲げた詩も対象とする。

5 『瀛奎律髓』巻一「登覽類」に、「楊誠齋詩一官一集、每一集必一變」という。

6 『江湖集』「視早憩鏡田店」「視早遇雨」(以上、巻一、零陵、三十六〜三十七歳)。「憫旱」「和蕭伯振禱雨」「早後郴寇又作」「早後喜雨四首」

「和昌英叔夏至喜雨」(以上、巻三、故郷、三十九歳)。「還家秋夕飲中喜雨」(以上、巻四、故郷、四十〜四十一歳)。「晚登清心閣望雨」

(以上、巻六、奉新、四十四歳〜四十九歳)。「荆溪集」「禱雨報恩、因到翟園」(以上、巻八、毗陵、五十一〜五十二歳)。「六月喜雨」

「和李子壽通判、曾慶祖判院投贈喜雨口號」「望雨」(以上、巻九、常州、五十二歳)。「朝天集」「聖上閱雨、遍禱未應、下詔避殿減膳、

感賦賦之」(以上、巻二十三、建康、六十一歳)。「江東集」「中元前賀余處恭尚書禱雨沛然霑足」(以上、巻三十一、建康、六十四〜

六十五歳)。「行部有日喜雨」(以上、巻三十二、池州・宣州、六十五歳)。「退休集」「喜雨」「六月初四日往雲際院、田間雨足、喜而賦

之」(以上、巻三十六、故郷、六十六〜六十九歳)。「久旱禱雨不應、晴天忽落數點」(以上、巻四十、故郷、七十五歳)。「夏夜喜雨」

(以上、巻四十一、故郷、七十六〜七十七歳)。「九月三日喜雨、蓋不雨四十日矣」(以上、巻四十一、故郷、七十六〜七十七歳)。「病

中喜雨、呈李古州」(以上、巻四十二、故郷、七十七〜八十歳)。なお、本論文で取りあげる楊萬里の作品は、『楊萬里集箋校』(全十冊、

楊萬里著 辛更儒箋校 中華書局 中国古典文学基本叢書二〇〇七年九月)を底本に使用した。

7 後述するように、常州での地方官時代にも、地方官として雨乞いをする疏を二篇制作しているが、詩も数首制作している。

8 『誠齋詩集箋證』薛瑞生校箋 陝西出版集團 三秦出版社二〇一一年九月

9 蕭東海は、この詩を「九月末旬」の作とする(『楊萬里年譜』上海三聯書店二〇〇七年)。

10 「鳳凰城」について、薛瑞生は「指京都」というが、ここでは永州のことと解釈した。

11 得錢即相覓、沽酒不復疑。

12 但覺高歌有鬼神、焉知餓死填溝壑。

13 『宋史』巻三十三「孝宗紀一」に、「乾道元年・・・五月丙子、郴州盜李金復作亂、遣兵討捕之。・・・八月癸未、獲李金」という。

- 14 『楊萬里選集』周汝昌選注 上海古籍出版社 一九七九年
 「荆溪集序」
- 15 「憫雨喜見雲、喜雲愁不雨」。
- 16 「喜雨不但人、松竹亦鼓舞」。
- 17 この詩の「望雨」という詩題は、「降雨を待ち望む（まだ降っていない）」という意にも解釈できなくはないが、ここでは「雨を眺める」の意にとった。
- 18 周汝昌前掲書。
- 19 雨乞いに成功した余處恭尚書に対して、「尚書幸有爲霖手、偏灑江東作麼生」（中元前賀余處恭尚書禱雨沛然霑足）詩。卷三十一「江東集」とのことはいでいる。
- 20 ただし、第三期の常州の「望雨」詩には、「定知秋疇滿、想見田父樂」（定めて知る秋疇滿つるを、想見す田父樂しむを）と、雨の激しさから「田父」が田に水が満ちるのを「樂」しんでいるだろうと「想見」（想像）している。